

# 浦幌口マンの会の竪穴住居復元

後藤秀彦

## I

1991（平成3）年7月に、浦幌町の第一次産業の振興を町内に所在するあらゆる資源を活用して進めることを目的に町内の中高年者で結成された「浦幌口マンの会」（会長：水野勝次）は、その

最初の事業として町内の遺跡等の観察見学会を行った。この見学会では、茂川流布川岸のイリジュームを含むいわゆる「川流布セクション」（斎藤・海保、1986）、十勝太遺跡群、オタフンベチャシ跡、岐阜農場事務所跡、生剛村外二ヶ村戸長な

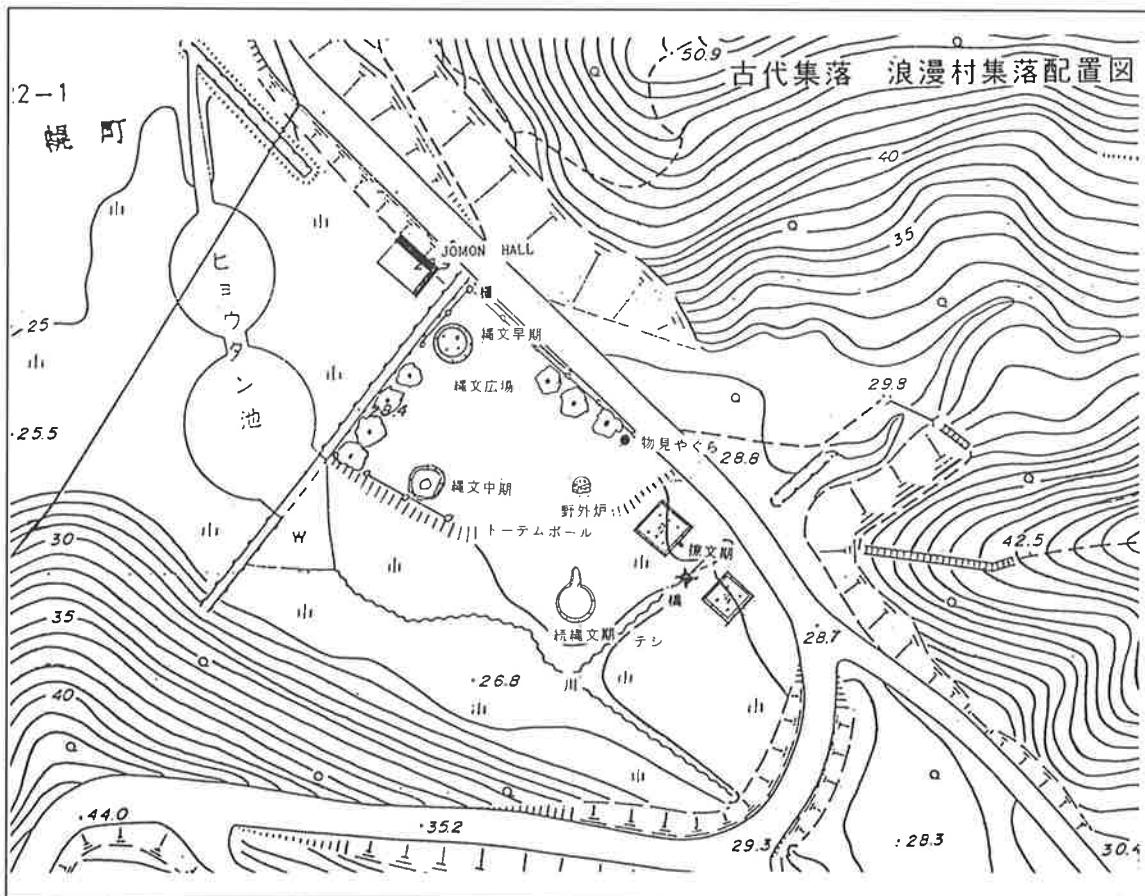


Fig. I 全体構想図

## 目 次

|                |      |   |
|----------------|------|---|
| 浦幌口マンの会の竪穴住居復元 | 後藤秀彦 | 2 |
|----------------|------|---|

**表紙写真説明：復元された竪穴住居** 浦幌口マンの会によって復元された縄文中期住居。雪の中の建物の周辺にはキタキツネの足跡が点々と残されている（後藤秀彦）

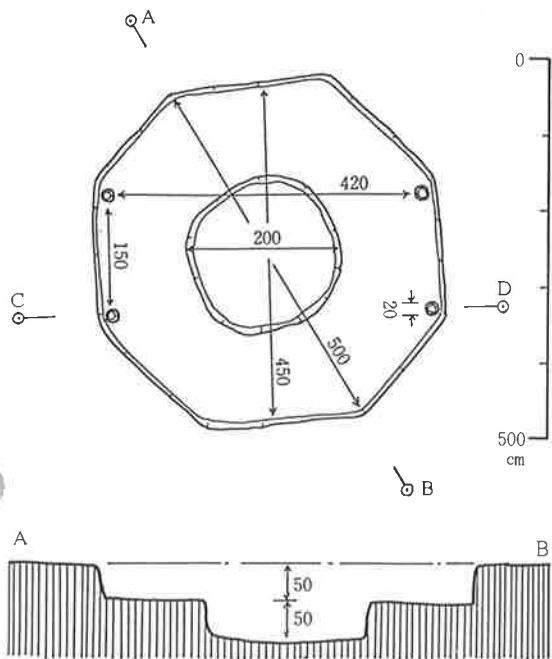


Fig. 2 穫穴住居の平面プランと断面



どを見学したが、この見学会後、先史時代住居の復元を試みることが提案され、筆者が見学会の案内をしたこともあり、筆者にその全般的な指導を要請された。

この段階では、建設位置や規模などは全く決まっていなかったが、幸いうらほろ森林公园内に適地が決まり、その内容についてつめた結果、縄文早期1、同中期1、続縄文期1、擦文期2の計5基をFig. 1の配置で建設することとし、本年度はとりあえず縄文中期の住居を復元することを試みることとした。

住居のモデルは基本的には町内の遺跡からのものを採用することを原則としたが、時期によっては適当なモデルがない場合もあり、その場合には十勝管内、道東部、道内の順で探すこととした。この縄文中期の場合、本町内では十勝太若月遺跡から同期の住居跡が不完全な形で検出されているが、全体像をうかがい知るほどのものではなく、十勝管内においても同様な状態であったので、宇田川洋（1979）の集成を参考とし、標茶町茅沼2遺跡第5号住居跡（豊原・湧坂・鶴丸、1979）をベースに新たに設計することとした。

この住居跡は概ね八角形を呈し、主柱4本の住居で、中央に直径4.1mの掘り下げのあるものであり、道内で発見されている同期の住居跡の中では比較的形の整った、特徴的なものであった。この住居跡の場合、その直径は概ね7.2mであった



5



6



7

が、用意することのできる材料等の関係から、これを全体的に圧縮し、直径5mを設計の基本とした。また、平面プランもややいびつな八角形から正八角形とし、床面の掘り下げは50cm、中央部の掘り下げはそこからさらに50cm下げとした。

資材は、準備が容易なカラマツ材を基本とし、主柱はナラ、梁はナラ・カラマツ、屋根材押さえはヤナギを使用することとした、また、屋根材にはヨシを使用した。

なお、この計画策定にあたり十勝考古学研究所石橋次雄、釧路市立博物館沢四郎・西幸隆、紋別市立郷土博物館因幡勝雄、標津町教育委員会畠田光明の各氏に多大なご教授を賜った。ここに明記して感謝申し上げたい。

## II

さて、実際に作業を開始したのは、1991（平成3）年11月17日である。以下、写真図版にそって建設経過を述べていきたい。

1・2は建設前に行われた地鎮祭。自然木と簡単な祭壇をしつらえ、鮭・果物・御神酒などを供え、作業の安全を祈願した。司祭者は会長の水野



8



9



10



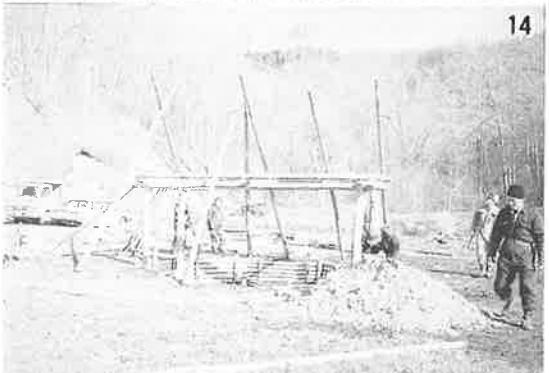
11



12



13



14

勝次氏。

豎穴の掘削は労力と時間を節約するため3のようにバックホーを使用した。バックホーでは直径5mをめどに円形に50cm掘削し、4のように中央部をさらに50cm掘り下げた。これと並行して、主柱のナラ材の皮剥きをした(5)。皮剥きは剣先スコップを使うのが有効であった。主柱の上部は梁を受けるために二股の材を使用した。また、この柱の土中に入る根部には廃油を塗って、防腐剤とした。6は受ける材の太さに合わせてチェーンソウで調整した。

皮を剥いた柱はFig. 2のように壁際に4本建てる。これも労力と時間を節約するためバックホー



15



17



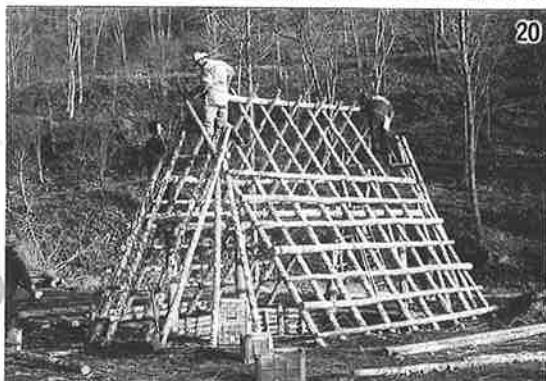
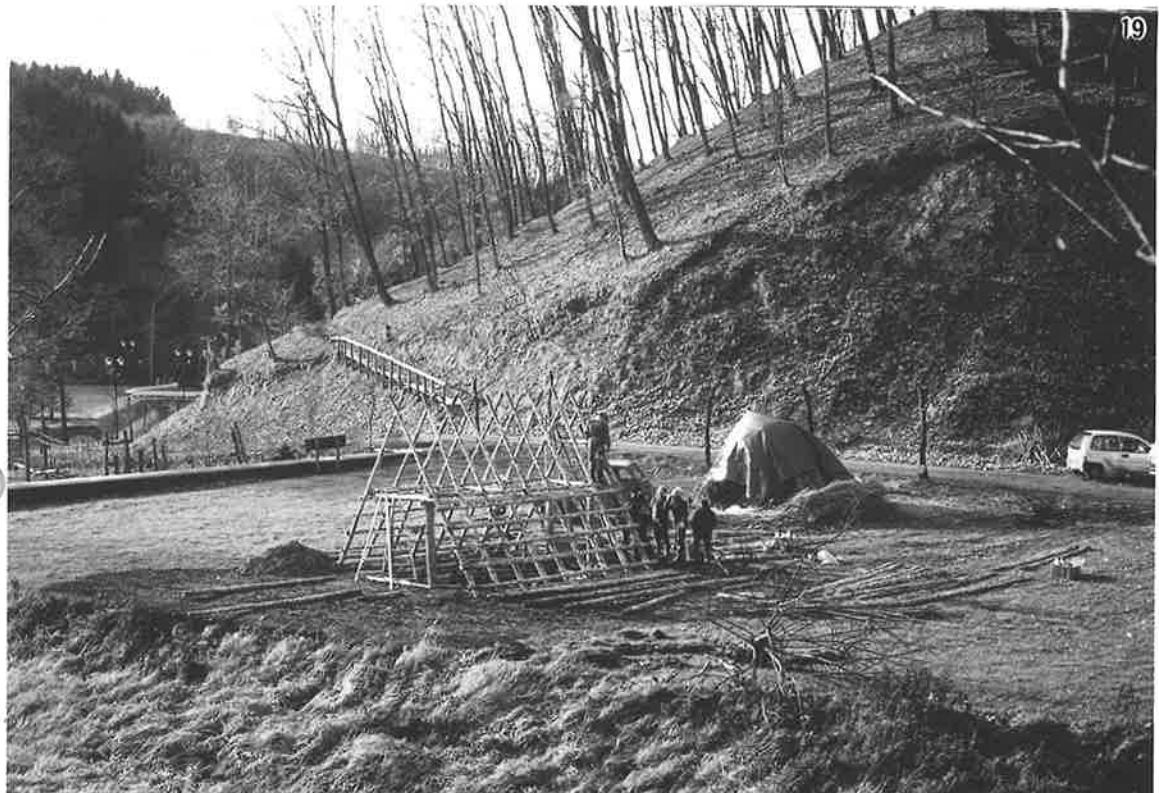
18



16

を使って埋め込んだ（7～9）。埋設後、梁を載せる二股の幅をチェーンソウで調整した（10）。梁と桁を載せたところで斜め材の垂木をかけてみたところ、梁の位置がやや内側に寄り、棟木の位置が低くしか構えられないことがわかったので、梁の部分を外側に約30cmほど出して、垂木をかける梁を作った（11）。このことから、主柱の位置と高さが10cm程度でも狂うと棟木の位置が大きくずれることがわかった。しかし、これを主柱埋設後にその位置や高さを調整することは事実上無理な話で、おそらくは今回のようにして補正したものと考えられる。

12は壁面の土止め作業である。バックホーで円形に掘削した掘り込みの壁を八角形に補正し、カラマツ材をもって土止めとした。その結果、13のように4～5段の横木で50cmの高さの掘り込み面をカバーすることができた。この作業と並行して垂木を掛ける作業を行った。垂木は15のように梁方向では梁と平行に並べ、桁方向は桁方向で平行に並べた。また、梁方向の上部では棟木の載せられるように16のように30～40cm程度クロスするようにした。一方、桁方向は地面から桁位置までとした。梁方向の頂上に17のように棟木を載せて、



頂上部の高さを調整した。垂木は、結局約5mの長さのところに約55cm間隔で9本掛けた。

横木は18のようにはほぼ同じ間隔で水平に取り付けた。この取り付けには5寸釘を使用した。これは、住居自体の安全性を考慮したものであるが、外側からは見えないように荒縄でカモフラージュした。

21のようにすべての垂木と横木が取り付けられた段階で、棟木の下部に煙出しようの開口部を作るための張り出しを作った。

この作業の途中で、鹿皮を使った上衣が完成し

てきた(22)。

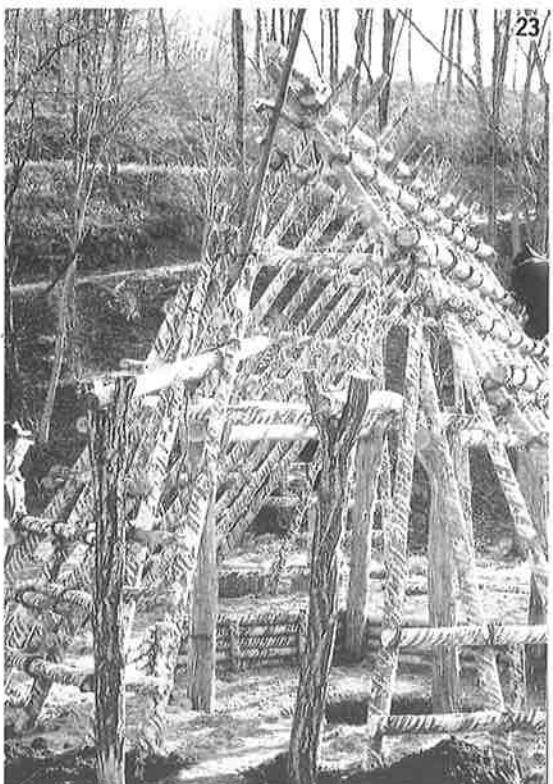
23は入口部の取り付けである。主柱には皮を剝がないナラ材を使用し、埋め込んだ。並行して入口部上部の煙出しを作成した(24・25)。

屋根材としてのヨシ(27)を運搬し、根本を揃える作業を並行して行った。ヨシは品質の良い、長さ2m50cm程度のものを使用した。

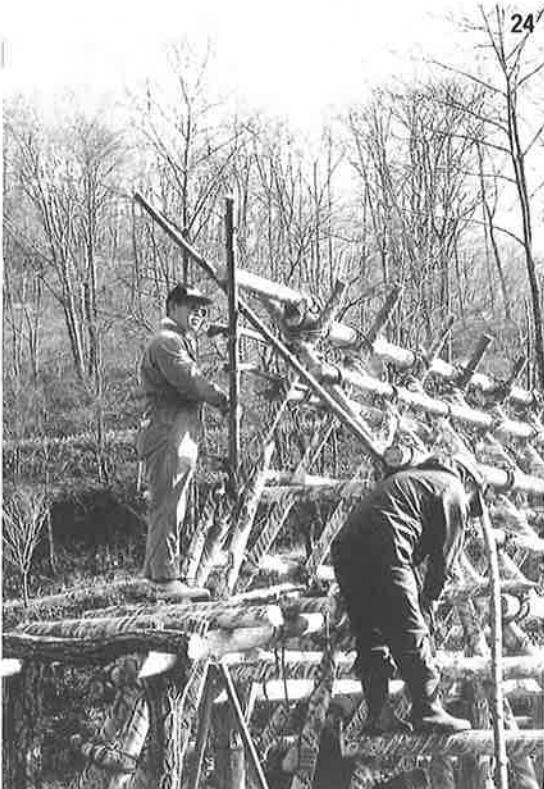
住居内部をきれいに仕上げるためによしづを張り、それに重ねてヨシを張った。屋根葺きは下から順に進め、弾力のあるヤナギ材で固定、荒縄でしばった(28)。29は内部から見た固定の状況で



22



23



24



25

ある。この作業にはヨシを張る者、縄を通す者、それを内部で受けて外へ送り出す者と結構な人手を要した。30は内部での縄通し作業の模様。この場合、竪穴として地面を掘り込んでいるため、屋根の頂上部分は非常に高く、はしごあるいは脚立のような機材が作業上の必需品であることが明らかとなった。

31・32はヨシを葺いている状況。33は出入口の取り付け状況。出入口はドアとし、33・34のように木を編み、ドア部に張ることとした。35は出入口部の屋根部分の屋根葺き作業。

床面から一段下げるためヤナギ

を打ち込み、ヤナギの細枝を編んだ（36）。また、中央部を炉とするために、火を燃やしてみた。炉は石組み炉とした。

37は完成間近かの竪穴住居。周辺の清掃と並行して、屋根材のヨシの整理を行った。屋根葺きの結果、ヨシ材は10段となり、その上に横位に棟押さえをヨシで作った。

38は裏側の煙出し。39は出入口のドアの取り付け状況と裏面のよしづばり。

40は住居及び周辺の清掃の終了した竪穴住居。

41は雪中の竪穴住居。



26



27



28



29



30



31

## III

以上が、竪穴住居建設の手順である。竪穴住居の建設は前述したように全体で5棟、ほかに物見やぐらや縄文広場、野外炉などを設置する予定となっている。今回の場合、建築時期が晚秋ということもあり、また全く経験のない作業でもあったので、先の見通しもたてずらかったので、「試験的にまず1棟建ててみよう」との意気込みでやったものである。

作業に先だって、標津町のポー川自然公園や紋別市オムサロ遺跡の復元住居を視察見学し、本番に備えたが、これらは擦文期などの住居復元であ

り、縄文時代住居の本格的な復元は道内にはなかったので、以前筆者が見学した長野県茅野市与助尾根遺跡や同県井戸尻遺跡の縄文中期の復元住居を参考とした。

しかし、細部については不分明な点が多く、結局は「浦幌式でやってみよう」との結論に達し、今回の試作となったものである。こうした経過の中で参考とした図書は次のとおりである。

- 金子皓彦・青木豊・塩野半十郎（1982）『縄文人の技術をさぐる』『縄文の美と謎』原始日本の再発見1（株）学習研究社
- 稻葉和也・中山繁信（1983）『日本人のすまい』



32



33



34



35



36

#### 一住居と生活の歴史』（株）彰国社

- 宮本長二郎（1984）「古代人の住まい—竪穴から掘立柱へ移る住居の変遷—」『別冊歴史読本』9—4 新人物往来社

- 宮本長二郎（1988）「さまざまな家」『古代史復元』2 縄文人の生活と文化 講談社

このほかに紋別市博物館が作成したオムサロ遺跡のパンフレットも大変参考になった。

#### IV

次に、竪穴住居を建設してみて、また利用してみて感じた点に若干触れておきたい。



37



39



38



40

まず、最初に感じたのは竪穴内部の暗さである。この竪穴の場合、出入口の $2\text{ m} \times 1\text{ m}$ だけの開口部からの採光だけであり、屋根葺き作業が進行するに従って、室内は次第に暗くなり作業が困難となるほどであった。今回の作業では発電機を使用して作業灯を着けたが、中で焚火か灯明でも着けていない限り、生活はおろか作業自体も困難であったろうと思われる。竪穴完成後においても、外から室内に入るにはちゅうちょするほどの暗さであり、出入口の反対の屋根部にでも採光用の窓を

作ることが不可欠であろうと思われた。

この辺りの考察については、考古学的な調査では解明不能の点があり、実験的にあるいは経験的に明らかにしていかなければならぬであろう。

次に感じられたのは床の状態である。掘られた地面は、それ自体に水分を含んでおり、竪穴内は湿度過剰になる傾向があるようである。屋根を葺いた後、2度程、炉に火を入れたが、数度の焚火ぐらいではこの湿気は除去できない。また、今回は貼床構造とするために床面に火山灰を敷くこと



としたが、この湿気もなかなかに抜くことはできなかった。しかし、その反面、床面の土は締まりきらなかった。

最後に、この作業に参加された方々のご氏名を明記し、筆を置きたい。

|       |       |       |
|-------|-------|-------|
| 水野 勝次 | 谷川 栄利 | 杉山 和徳 |
| 石丸 晴朗 | 長嶺 晃  | 山本 力  |
| 田村 靖邦 | 中野 育  | 川口 満  |
| 秋田 誠順 | 中山 和子 | 川口 久子 |
| 門馬 孝敬 | 円子 紳一 | 室崎規矩子 |
| 水野 久子 | 谷川 昭子 |       |

また、小山文雄氏には全面的に作業上・技術上の指導をいただいた。おそらく、氏がいなければ今回の竪穴造作は不可能であったと思われ、身についた技術の大しさ、草小屋を造るときの細かなノウハウの貴重さを思い知らされた竪穴づくりであった。

(浦幌町郷土博物館学芸員)

#### 参考文献

- 宇田川洋 (1979) 「北海道縄文時代中期の住居址」  
『茅沼遺跡群—釧路川中流域の遺跡—』  
斎藤常正・海保邦夫 (1986) 「白亜紀—第三紀(C-T)境界と恐竜の絶滅」『月刊地球』8-3  
豊原熙司・湧坂周一・鶴丸俊明 (1979) 『茅沼遺跡群—釧路川中流域の遺跡—』

|                    |     |
|--------------------|-----|
| 1992年3月1日          | 印 刷 |
| 1992年3月10日         | 発 行 |
| 編 集 後 藤 秀 彦        |     |
| 発行責任者 石 川 安 次      |     |
| 発行所 浦幌町郷土博物館       |     |
| 北海道十勝郡浦幌町字東山町23番地1 |     |
| 印刷所 大同出版紙業株式会社     |     |
| 北海道帯広市西7条南6丁目      |     |